

多言語コミュニケーションセンターと 選択外国語教育

—私の思い出—

藤 田 知 子

MULC and Elective Foreign Languages Education: My Memories

Tomoko FUJITA

This paper is based on my 28 years of professional experiences at Kanda University of International Studies. First, I note what gave me positive and strong impressions as a professor of French. Then, as the first director of MULC from 2008 to 2017, I argue that the educational reform of elective foreign languages, which had already taken place, promoted the creation of MULC and encouraged its development.

キーワード： 選択外国語、教育改革、マルクの創設

1. はじめに

私は多言語コミュニケーションセンター（Multilingual Communication Center: 愛称 MULC 「マルク」）のセンター長を 2008 年から 9 年間務め、2017 年 3 月に大学を退職した。神田外語大学での教員生活は 28 年におよぶが、就任当時はいつの日かマルクのような多言語対応の自律学習支援施設が創られるとは想像だにできなかった。設立当初は類例を見ない施設だったため、立ち上げから安定した軌道に乗るまでまったくの暗中模索だった。本稿では、マルクの誕生を促し、その後の発展を後押ししたのは、先行して行なわれていたいわゆる第二外国語の教育改革であったことを指摘したい。その際、個人的な回想に傾くことをおそれずに、在任中の私にポジティブな印象を与え、退任した今も覚えていて、これからも心の拠り所となるであろう事がらを記録しておきたい。

2. マルク以前の神田外語大学

2.1. 職を得るまで

私は1988年4月にフランス語担当の専任講師として神田外語大学に着任した。開学の翌年のことである。

専門はフランス語学で、フランス語の名詞に関わる事象を研究していた。仙台の大学院で学び、フランスに留学した。帰国した後は長らくオーバードクターの時代を過ごした。その間、日本フランス語学会¹⁾という小さな学会に所属し、東京でほぼ毎月開かれる例会に通った。東北新幹線などまだない時代である。その頃の私にとってこの学会は知的刺激と人的交流に富むオアシスだった。

その後、幸い夫が東京に就職した。おかげで毎月の例会にはがぜん参加しやすくなった。本の著者としてしか知らなかった先生方と一緒に、発表について様々な議論をし、フランス語の問題を自由に語りあうことができた。当時のフランス語の世界は圧倒的に文学研究が主流で、フランス語学を志す者は少なかった。その小ささ故か、意欲と情熱のある者には、ジェンダー、年齢、学閥、経歴にかかわらず、誰にでもチャンスを与える民主的な学会だった。その間、仙台の恩師や先輩のおかげで、フランス語の非常勤講師の仕事も少しずつ増えていった。

学会は『フランス語学研究』という機関誌を毎年発行していた。編集委員は常勤のポストについている先輩の会員が務めていた。だが、そうこうするうちに、編集委員会の世代交代をはかるため、非常勤講師である私にも編集委員にならないかという打診があった。今思えば、小ささ故の、人手不足解消手段だったのだろう。引き受けて良いものか大いに悩んだが、「非常勤でもできることを示すために引き受けなさい」と夫が言う。その言葉に押されて、当時は学会で初めて、非常勤講師でありながら編集委員となった。

こうして私は仲間たちに揉まれ互いに切磋琢磨しながら、研究活動をすることができた。同時に学会の企画や運営にも関わっていった。毎月の例会に加えて、月1回の「フランス語学を一緒に勉強する会」というミニ研

研究会を仲間と一緒に作り、主宰した。発表の途中いつでも、どんなにつまらないことでも遠慮なく質問してよい、さらには出席者全員が必ず一回は発言するというルールで、毎回3時間徹底して議論した。この小さな学会と勉強会で学んだことは計り知れない。ここで経験したことがフランス語の教師として、また後にマルクを運営する立場になってからも、私の支えとなった。

2.2. 開学まもなくの神田外語大学

そうこうするうちに学会の先輩に当たる泉邦寿氏（上智大学名誉教授）が古田暁先生に私を紹介してくださった。古田先生は異文化コミュニケーション研究所（当時）の所長を務めると同時に、大学設置準備委員会の中心メンバーとして、フランス語の教員を探しておられた²⁾。神田外語大学と私のご縁はこうして始まった。

着任した頃の幕張は幕張新都心計画の推進途上であり、幕張メッセもまだオープンしていなかった。キャンパスから眺める海側の広大な風景はまだ平らなままで、高層ビルが林立する近未来都市のような現在の姿とはまるで異なっていた。

開学2年目の大学には4つの学科（英米語、中国語、スペイン語、韓国語）があり、定員は1200名。1年生と、初めて後輩ができたばかりの2年生がいた。校舎は1号館と2号館。1号館の2階に個人研究室をいただいた時はやはり感激した。隣には同時に着任したドイツ語の志賀浪優子さんがいた。机、椅子、テーブル、からっぽの本棚。他には何もなないピカピカの研究室だった。

教員としては一般教育（当時）に配属された。一般教養科目を担当する教員組織である。着任の時期にズレはあるが、哲学、日本倫理思想史、宗教学、歴史学、法学、社会学、経済学、心理学、生物学、化学、美術、教育学、体育スポーツ、そして第二外国語のドイツ語とフランス語の専任教員がいた。

こうした多分野の教員を広汎な人脈を駆使して探し集めたのが古田暁先生である。古田先生が初代の一般教育部長だった。学識の深さ、幅広さに

加えて、お人柄が温厚で気品あふれる紳士でいらした。学食でランチを一緒にしたとき、「小さいけれども良い大学にしましょう」とさりげなくおっしゃった。なるほど、規模は小さくても、他にない個性をもつ、質の高い、魅力的な大学。私は共感した。

歴史学の虎尾俊哉先生がおっしゃったことも忘れられない。「100年の歴史をもつ大学と新設の大学を比べれば歴史は100倍の差があります。でも20年後には120年と20年、差は6倍に、50年経てば差は3倍に縮まります」というのだ。この言葉にもとても励まされた。

学務としてはまず入試委員会に配属された。会議には初代学長の小川芳男先生が出席されていた。ご病気のため、会議の進行は他の構成員に委ね、じっと会議を傍聴されていた。いざ合格者を決定するとき、「このままでは女子が多くなりすぎる。もう少し男子を合格させた方がよいのではないか」という意見が出た。「時代の流れに逆行するようなことをしてはならない！」即座に小川学長がそうおっしゃった。私の記憶に間違いがなければ、小川先生がこの会議で発言されたのはこのときだけだった。値千金とはこのことだ。外国語学部のためか、他の大学に比して女性教員が多いことも心強かったが、学長たる方がこういう発言をされたことはとてもうれしかったし、誇りに思った。

授業が始まった。フランス語を教えてすぐにわかったことは、予想以上に良質な学生が集まっていることだった。赴任する前は、新設校だからレベルは大丈夫かなと、いささか不安だった。だが、すでに教えていた他の大学と比べて何ら遜色がない。さらに小規模大学の長所なのか、学生たちの多くは廊下で会うと会釈したり、挨拶してくる。マンモス大学ならこうはいかないはずだ。フレンドリーで、コミュニケーションをいとわず、愛嬌がある学生が多いと感じた。

この小さな、できたばかりの大学には立派な先生方と学生たちが集まっている。もしかしたら、想像していた以上に豊かな可能性をはらんだ、おもしろい職場なのかもしれない。私はそう感じていた。

2.3. ドイツ語とフランス語の教育改革案

こうして6年が過ぎた。ある日、ドイツ語の志賀浪さんとフランス語の私は井上和子学長(当時)から突然呼び出しを受けた。志賀浪さんと連名で出していた1995年度の学内研究補助金の申請についてだった。「テーマがとても良い。採択予定数を越えてしまうが、こちらも認定してもらえるように理事会と交渉してみます」とおっしゃった。著名な言語学者であると同時に、実務面でもとてもエネルギッシュな方だった。申請は受け入れられた。

「外国語学部における第二外国語教育の活性化——ドイツ語とフランス語における方法論的考察とその実践」、これがタイトルだった。当時、第二外国語は「副専攻語科目」と呼ばれ、語学科がある4つの言語(英語、中国語、スペイン語、韓国語)と、語学科はないが専任教員がいるドイツ語とフランス語の6つを開講していた。その中から一つの言語を選択し、週2回2年間8単位を必修として修得する。それが卒業要件として課されていた。

今にして思えば、第二外国語というからには、ドイツ語とフランス語だけでなく、英語、中国語、スペイン語、韓国語の4つの言語とも関連させて構想すべきだった。だが、外国語の教員である私たちは、たとえ6言語と言えども言語間の違いは大きく、他の言語についてはよく知らないことを自覚していた。現在はスタンダードになった多言語・多文化の発想はまだ稀薄だった。学科と言語の壁を越えたプロジェクトなど、とうてい思いつかなかった。第二外国語教育の活性化の対象をドイツ語とフランス語という、同じ一般教育に属する2つの言語に限定したのはそのためである。

2.4. 第二外国語の教育改革

こうした語学科ごと、言語ごとの縦割り意識を、外国語学部として多言語・多文化の発想に転換し、変革しようとしたのが、石井米雄学長である。そして、そのきっかけとなったのが、2001年の国際言語文化学科(当時)の開設³⁾と、先生が命じられた第二外国語の教育改革だった。

石井学長は1997年4月に就任され、その翌年、ドイツ語の志賀浪さんと

フランス語の私に次のような指示を出された。

- (1) 第二外国語教育の現状を根本から見直し、外国語大学にふさわしい教育をデザインしてほしい。
- (2) その際、選択必修制を廃止して完全な自由選択制とすることを、1つの重要な選択肢として検討してほしい。

外国語を学ぶのは容易なことではない。学生本人の自発的な知的欲求から真摯に取り組まないかぎり実りは少ない。石井学長は東南アジア史研究の碩学であり、地域研究に必要ないくつもの言語をあやつるポリグロットである⁴⁾。第二外国語の教育改革は先生の研究者としての信念に基づく問題提起だった。

そこでまず私たちは学長の諮問機関として「副専攻語科目運営検討委員会」を作り、6つの言語の委員で検討を開始した。第二外国語のカリキュラム改定はすでにいくつかの大学で行われていた。私はフランス語を中心に情報収集した。わかってきたことは、多くの場合、教育的な観点よりも、経営的な理由によって改定が行われていること、そして、その改定が教育面に壊滅的な打撃を与えていることだった。例えば、フランス語では選択必修制の頃は1000人いた履修生が、自由選択制に変えたとき70人に減ったケースがあり、衝撃を受けた。

私たちは悩みに悩んだ。学会の友人たちにも相談した。心配してくれて、「十分納得できなくても上の意向に従わざるをえないこともある。いまは受け入れてもっと力をつけ、それから変えていくこともできるのではないか」とアドバイスしてくれた。

さらにドイツ語の志賀浪さんが1999年度をもって、ロンドンに生活の拠点を移すため退職した。2000年度からは、第二外国語の教育にたずさわる専任教員はフランス語の私だけになった。志賀浪さんは教務に精通し有能だった。大学を去る前に、外国語学部における第二外国語教育が目指すべき方向とその実現プロセスについて指針をまとめ、私に託してくれた。彼女のレポートは今でも私の手元にある。

委員会での討論を重ね、完全な自由選択化は避けることに決まった。2005年度から英米語学科の学生は、卒業要件単位として、開講されている

12の言語から一つの外国語を選択し、週2回1年間4単位を必修として修得する。他の学科は自由選択とした。すでに学んでいる英語と、新たに専攻する地域言語を学ぶからである。12の言語とは中国語、スペイン語、韓国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、ポルトガル語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語である。名称も「選択外国語科目」と改めた。

この科目群を管理・運営するために「選択外国語科目運営小委員会」が発足した。学科・専攻がある中国語、スペイン語、韓国語、ポルトガル語、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、そして学科・専攻はないが専任教員がいるフランス語とアラビア語の9言語、9名の委員が構成員である。言語ごとに行われてきた外国語教育に、はじめて、学科・専攻の枠を越えて、言語横断的に、12ある選択外国語の問題を検討する委員会が誕生した⁵⁾。選択外国語を中心に活動する専任教員はフランス語の私だけなので、私が委員長になった。

3. マルク創設以降の神田外語大学

3.1. マルクの誕生

他方、2003年にはあらたに6号館 SACLA (Self-Access, Communication, Learner, Autonomy: 愛称「サクラ」)が開館した。2階には英語中心の自律学習支援施設であるELIラウンジとSALC (Self-Access Learning Center: 愛称「サルク」)が開設された。ELI (English Language Institute)の教員組織とサルクのラーニング・アドバイザーシステムは、先進的な英語教育の試みとして対外的にも高い評価をうけ、第1回文科省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された。サルクは英語以外の言語への目配りも忘れなかった。本学で学ぶことができる12の外国語のための書棚も小さいながら用意された。

2004年前期に、選択外国語科目運営小委員会は、サクラ館の使用状況について学生アンケートを行った。500名を越える学生から回答をえた。英語については予想どおり満足度が高かったが、英語以外の言語については

不公平感が拭えない。英語以外の地域言語に対応する新たな多言語の自律学習支援施設を作ってほしい、そんな要望が学生だけでなく、担当教員の間にも芽生えていた。

それまでも学科・専攻がある7つの地域言語には CLI (Chinese Language Institute: 中国語)、SLI (Spanish Language Institute: スペイン語)、ハンゲルバン (韓国語) などの談話空間があったが、それぞれの学科研究室の近くにテーブルと椅子を並べた小規模なものだった。場所は学科研究室ごとに分かれていて、空間的なつながりはなく、運営も学科・専攻ごとに行われ、相互の交流はまったくなかった。こうした現状を選択外国語科目運営小委員会は、赤澤正人学長(当時)に答申として提出した⁶⁾。

その後まもなく、創立20周年記念事業として理事会が7号館・新図書館センターを建設することを決定した。3階建てで、1階は図書館となる。残りのフロアをどのように活用するか、教員にアイデアを募った。そこで選択外国語科目運営小委員会は、英語以外の言語の自律学習支援センターと、いくつかの教室を備えたフロアを作ってほしい旨、要望を出した。2005年秋のことである。提案は受け入れられた。

こうして、英語の自律学習支援施設サルクの、多言語への発展形としての言語センターが構想された。建物は、本学が新白河に保有する英国研修村ブリティッシュ・ヒルズがモデルとなった。ブリティッシュ・ヒルズの徹底した本物志向の精神が、本学の異文化に対する敬意の表し方として、マルクの言語エリアの造りにも受け継がれた。こうして2008年秋に7号館が完成し、その2階に多言語コミュニケーションセンター (Multilingual Communication Center) がオープンした。愛称は英語の「サルク」(SALC)の姉妹施設として、「マルク」(MULC)と決まった。

マルクの創設とともに、選択外国語科目運営小委員会は、選択外国語科目だけでなく、マルクの管理・運営も兼務することになった。名称も「多言語教育運営小委員会」と変更した。学科・専攻がある7つの言語エリアには、語学教育の専門資格を持つネイティブの語学専任講師が常駐する。そこに、日本語を学ぶ留学生も加わって談話活動を行う。そのため、多言語教育運営小委員会は、留学生への日本語教育に関わる委員にも加わって

もらい、10言語、10名の委員からなる委員会となった。

そして私は、これまでの経緯から多言語教育運営小委員会の委員長となり、マルクの初代センター長に任命された。任命にあたり、佐野隆治理事長(当時)から面談に呼ばれた。「建物の形をつくるのは理事会、それに内容を与えるのは教師の役割です。語学専任講師の先生方と同じように、月～金9時～5時はマルクに張りつくくらいの気持ちで、心して取り組んでください」と言われ、身が引き締まる思いがしたことを今も覚えている。

3.2. 「その他の言語」の存在意義

このように、選択外国語科目の教育改革は、最初は石井米雄学長というトップからの「外圧」によって否応なしに始まった。だが、右往左往と試行錯誤を経て、雨降って地固まるの感があった。改革に早期に取り組んだ成果は大きかった。それが下地となって、多言語教育の管理・運営のノウハウが蓄積され、組織面も改編を重ね、体制はほぼできあがっていた。だからこそ、多言語の自律学習支援施設を求める答申もすぐに提出できたし、マルクができあがってからも比較的スムーズに運営することができた。その意味で、先行して行われていた選択外国語の教育改革がマルクの誕生を促し、マルクのその後の発展を後押ししたとすることができるだろう。

改革については意見が対立する形になったが、石井米雄先生は私のことを「議論に値する人ね」と尊重してくださった。また、私がマルクのセンター長に任命された時は、すでに学長を退き学術顧問になられていたが、「あなたがこれからしようとしていることはクリエイティブなことです」と励ましてくださった。そして「いくつもの言語が互いに閉鎖的に並列しているだけでは多言語とは言わない。言語間にそれまで見えていなかった関係性や新たなつながりが生まれてくる時、初めて多言語と呼ぶことができます」とおっしゃった。また「何かを決めなければならないが、よくわからないことがある時、自分たちがなんでも知っているわけではないから、そのことをよく知っている他の人の意見を聞いた上で決めることが大切です」とも言われた。石井先生のこうした言葉を励みとして私はマルク

の運営に携わることができた⁷⁾。

そして私は2017年度で大学を退職した。その結果、教授会メンバーで、学科・専攻のない選択外国語の教員は一人もいなくなってしまった。非常に残念である。学科・専攻がある言語の教員は専攻外国語の研究と教育を行うのが本務であり、選択外国語の教育を兼務する。専攻外国語の教育を第一に考えるのは自然なことである。他方、学科・専攻のない選択外国語の専任教員は選択外国語の研究と教育が本務である。同時に、学科・専攻の枠組みの外にある「その他の言語」にたずさわる者として、多言語全体を公平に見わたしやすい位置にある。多言語のマルクを取りまとめていく上で必要な、学科・専攻の協力を得られやすかったのは、私が「その他の言語」の教員だったことが大きいと感じている。言語教育に多言語を俯瞰する視点が欠けた組織は、長期的には弱体化するのではないだろうか。

4. 終わりに

2018年の春、フランスのパリでしばらく時を過ごす機会を得た。髪が伸びてきたので美容院に行った。女性の美容師が一人、助手が二人、客が数人いた。自分の番が来るまでしばらく待った。美容師さんと客がとても楽しそうにおしゃべりしている。内容はよくわからないが、笑い声が絶えない。

私の番になった。「お宅の美容院はとても雰囲気がいいですね。私が好きな『キャラメル』という映画を思い出しました」と話しかけた。美容師さんは「その映画は私も大好きですよ!」と言ってとても喜んだ。それから「日本の方もときどきみえますよ。フランス語はほとんど話せないのに、髪型もカラーもまったく変えちゃうお客さんもいて、正直、勇気あるなあって思います」などと話が弾んだ。

『キャラメル』は、私の趣味が昂じて開くようになったマルク映画鑑賞会で、菊地達也氏が解説を担当されたレバノン映画である(第2回、2010年7月13日)。激しい内戦のさなかにあるレバノンの首都ベイルートにある美容院が舞台である。美容師と客のやりとり、思うにまかせぬ恋模様などを細やかに暖かく描きだしている。この作品は「戦争を描かない、おそ

らく初めてのレバノン映画」で、「ナディーヌ・ラバキ監督はいつ壊れるかわからない、庶民の平穏な日常のみを描いた」。そんな解説を聴いたことを思い出したのだ。

こんなふうには、マルクを通して得た経験は、大学を離れた今もなお、ふと姿を現し、私を楽しませ、助けてくれる。神田外語大学で過ごした年月は私にとってかけがえのないものである。いろいろな方々に支えていただいたことを心から感謝している。神田外語大学のさらなる発展を願ってやまない。

謝辞

マルク特集号を組んで下さったグローバル・コミュニケーション研究所、そして、研究所との仲介の労をとって下さったサウクエン・ファン先生に心からお礼を申し上げます。

そして、この小文をドイツ語の同僚、志賀浪優子さんに捧げます。

注

- 1) 日本フランス語学会については <http://www.sjlf.org/> 参照。
- 2) 古田暁先生の業績と本学との関わりについては次のサイトが詳しい。 https://www.kandagaigo.ac.jp/memorial/interview/10/interview_10_10.html。末盛 (2016) も興味深い。
- 3) 国際言語文化学科は地域言語と英語をダブルメジャーとする学科。インドネシア語、ベトナム語、タイ語、ブラジル・ポルトガル語の4つの専攻があった。2012年度からアジア言語学科とイベロアメリカ言語学科に改編された。
- 4) 石井米雄学長の数多くの著作の中で、私にとって親しみやすかったのは石井 (1991、2003、2011) である。
- 5) 詳しい経緯は藤田 (2006) を参照。
- 6) 選択外国語科目運営小委員会答申「学生の SACLA 館使用状況に関するアンケート (英語/英語以外)」2004年9月。
- 7) マルクの創立とその後の活動については藤田 (2011、2016) を参照。

参考文献

- 石井米雄 (1991) 『タイ仏教入門』 めこん
石井米雄 (2003) 『道は、ひらける：タイ研究の五十年』 めこん
石井米雄 (2011) 『語源の楽しみ』 めこん (『英語の語源』 (2018) 角川ソフィア文庫に再録)

- 末盛千枝子(2016)『「私」を受け容れて生きる：父と母の娘』新潮社
- 藤田知子(2006)「外国語学部における第二外国語教育の活性化の試み：「選択外国語科目」の4年間」『神田外語大学紀要』18号、519-534頁
- 藤田知子(2011)「多言語コミュニケーションセンター・事始め～2008-2010年度」『国際社会研究』2号、217-231頁
- 藤田知子(2016)「多言語コミュニケーションセンター 2011-2015年度の活動と展望」『神田外語大学紀要』28号、397-413頁